

歴博 くらしの植物苑だより

第121回くらしの植物苑観察会 4月29日(水・祝)

歴博くらしの植物苑花ごよみ

辻 誠一郎(東京大学新領域創成科学研究科・教授)

くらしの植物苑とは

歴博くらしの植物苑は、1995(平成7)年の秋に開苑しました。今年の秋で満14年の誕生日を迎えることとなります。日本人の民俗に生き続けるくらしの中の多様な植物たちを育て、その姿かたち、生きざまを生きた文化財として展示しているのです。食べるための植物、薬としての植物、道具や建物などの材料になる植物、見ることや香りに触れることで安らぎをもたらす植物など、くらしの中に深く溶け込んできた植物たちがいくつかのゾーンに分けられて育てられています。

特別に期間を設けて展示される以下のような季節の伝統植物のほか、オランダのライデン植物園から寄贈されたシーボルトゆかりの植物や、岐阜県白川村の天然記念物オオタザクラ(花びらが百枚前後)などが季節をにぎわせてくれます。

季節をめぐる伝統の植物

このくらしの植物苑には、伝統植物あるいは古典園芸植物と呼ばれているいくつかのグループの植物たちが保存されています。多くは近世の江戸時代に、いわゆる江戸園芸の主役となった植物たちです。その歴史は江戸時代よりはるか前にさかのぼるものもあります。たとえば、ひょうたんは縄文時代の始まりの頃までさかのぼり、実に日本においては1万年の歴史をもっています。くらしの植物苑では、例年、季節を代表する植物たちを「季節の伝統植物」として、季節ごと、それぞれ展示期間を設けて温室やあずまやを中心に展示しています。

今年は、「伝統の桜草(サクラソウ)」と「春のもみじ」を春から初夏に、続いて「伊勢ナデシコ」を初夏の5月中・下旬に、すっかりおなじみになった「伝統の朝顔」を夏から秋の8月に、「伝統の古典菊」を秋の11月に、そして「冬の華・サザンカ」を12月から1月に、特別に展示することにしています。

桜草は、日本に自生するサクラソウを基本として江戸時代初頭に江戸園芸の台頭となったものですが、一重でも花型や花の色の微妙な変化が捉えられていったまさに日本の美意識を再認識する機会を与えてくれるものです。同じ時期に「春のもみじ」なんて、と思われるかも知れません。でもご覧になってください。真紅と思われる紅や、明るく柔らかな緑、なんと鮮やか色と言ってもいいかも知れません。春のもみじは秋の憂愁とは違って、「赤と青」という力強い生命感を感じ

させてくれるでしょう。

伊勢ナデシコも、江戸園芸において育まれましたが、野生のカワラナデシコとは違って、花びらが長く、そして垂れ下がるほどに長く変異したもので、桜草に似て花型や花の色の微妙な変化が見逃されるはずはありませんでした。花びらが垂れるのは元気がないからではないのです。西洋の園芸に慣れ親しんでしまうとそう感じるかも知れませんが、それぞれが個性的な文化なのであり、むしろこうした日本の文化が忘れ去られようとしていることは間違いありません。

朝顔は、江戸時代後期の文化が開いた文化文政期、続く嘉永安政期、そして明治へと大きく変容を遂げた「変化朝顔」という巨大なグループのことです。九州大学で収集され、その後は歴博くらしの植物苑においても維持されてきた系統が展示されます。葉や花にさまざまな突然変異が表現され、花びらが数十枚にもなった柳牡丹や獅子牡丹、変化は乏しくても、花びらが硬くて色鮮やかな渦、花びらに切れ込みがある切れ咲き、花びらが反り返って台をつくる台咲きや車咲き、花びらが深く5枚に切れ込んで反転する石畳咲きなどが、パフォーマンスの極致とさえ言われる朝顔の世界を余すところなく語ってくれるはずです。

古典菊は、江戸園芸の主役となりえた菊の世界そのものです。菊と言えば日本、日本と言えば菊と言われるほど、菊は日本を代表する園芸植物であり文化でもあるわけですが、朝顔と同じく日本の国家形成期の古代に中国から日本に渡ってきた植物だったのです。日本に渡来後、中国とは違った歴史を歩むことになり、日本独自の菊文化が育まれたのです。それが江戸園芸における古典菊だったと言ってもいいでしょう。くらしの植物苑には、肥後熊本で育まれた特異な「肥後菊」の多数の系統が維持されてきました。これは花型が小さい上、一周する外側の花の数が少ないので、元気がないねと感じる人も多いのではないかと思われそうですが、一見単調な中に花型や花の色の変化に気づかれる人もまた多いはずです。現代の菊花展をにぎわせている大輪の菊とは大きく違いますが、そこにこそ日本人が育んだ妙があるのであり、歴史性が隠れているのです。

サザンカは、東京農工大学を定年退職される箱田直紀先生が、大半の貴重な系統をこのくらしの植物苑に生きた文化財として寄贈されたものです。2001年のことです。サザンカの仲間は大きくはサザンカ群、カンツバキ群、ハルサザンカ群に分かれます。一重または二重の江戸サザンカの代表的なものはサザンカ群に入ります。カンツバキ群は八重など華やかなものがあり、真冬に花開きます。冬から春にかけてもっとも遅くまで咲くのがハルサザンカ群です。サザンカは沖縄から九州にかけて自生していましたが、園芸植物として各地に伝播していったのです。

次回予告

第122回くらしの植物苑観察会 2009年 5月23日(土)
「佐倉城址の初夏の植物」 原 正利(千葉県立中央博物館)
13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要 要入苑料